

〈書評〉

岩波書店 大航海時代叢書エクストラ・シリーズ

『インカ皇統記』

インカ・ガルシラーソ・デ・ラ・ベガ著 牛島信明訳 全二巻

『メキシコ征服記』

ベルナル・ディーアス・デル・カスティージョ著 小林一宏訳 全三巻

1985年11月16日, 1986年2月6日, 6月27日, 8月29日, 1987年3月27日。

エクストラ・シリーズ第一回発行分は完売だそうである。『インカ皇統記』はもう倉庫に一冊もなく、『メキシコ征服記』全三巻も第一巻が売り切れたという。慶賀すべきことだし、刊行のペースも模範的だったけれども、一面、もう少し大部数・低価格でもよかったのかも知れない。ともあれ、二つの基礎的な原史料が良質の訳文で読めるようになったことを喜ぶたい。牛島氏はガルシラーソの流麗なスペイン語文をそのまま無理のない日本語文に移すことに成功している。ベルナル・ディアスについて言えば、あの原文を読みやすいなだらかな日本語に直す作業を全212章にわたってなし遂げた小林一宏氏の不退転のねばりに対して心から敬意を表したい。原文をご存じの方も多と思うけれど、あれを一切工夫なしで訳すと、こんな具合になってしまうのだ。

そうして、偉大なモンテスマは、かれらの習俗にのっとって、とても贅沢に装ってやってきた。そうして、足にはコターラみたいなものを覆っていた。コターラというのは足に覆くものをそう云うのだ。履物の底は黄金で、とても値打ちものの宝石細工がその上にかぶさっていた。そうして、かれの腕を取って支え導いてきた四人の領主たちは、

かれらの習俗にのっとして贅沢な様子の装束でやってきた。どうやら、かれらの主君と一緒に [帝都に] はいるためにどこか道の途中に整えてあった装束であるらしかった。というのはわれわれを迎えにきたときに着ていた装束はもう着ていなかったからだ。それと、これらの四人の領主たちのほかに、別の四人の大物のカシーケたちが、一同の頭上に日除けをかざしてやってきた。それと、別の大勢の領主たちが、偉大なモンテスーマの先にたつて、モンテスーマの足が踏もうとする地面を掃き清め、じかに土を踏まぬよう布地を敷きながらやってきた。これらすべての領主たちは、モンテスーマの顔を直視するなど思いもよらぬ様子で、視線をうつむけ、とても恭しくしていた。腕をとってかれを支え導くあの四人だけは例外で、それはかれらがモンテスーマの親族であり甥だったからだ。(対応箇所は第1巻353頁)

これでは日本語の文章として商品価値がないのである。筆者のみているポルーア版では、上の箇所にピリオドは二つしかない。「そうして……というのは……それと (y...que...y...)」がいつ果てるともなく続く重文で、同一の副詞 *muy* や、同一の動詞 *venían* や、「かれらの習俗にのっとして」という同一の表現が何度でもお構いなしに繰り返される。原文の文体の悪口を言っているのではない。この文体はベルナル・ディアスの魅力の一部であり、内容と切りはなせない。ここにひとりの老兵がいて、すてきに頭が明晰で、伝達したい事物や物語が頭の中では輪郭線もくっきりと形をとっている。ところがこの老兵はティトゥス・リウィウスもプルタルコスも読んだことがなく、その読書範囲は騎士物語と実用法律文に限られている。老兵は頭の中の事物や物語を自分の使える範囲の言葉で伝達しようと苦心惨憺するのだが、驚くべきことにこの老兵は、もたもた、くどくど、しきりと口ごもったあげく、結局そのことに成功してしまうのだ。だからこそベルナル・ディアスは読んで面白い。「文は人なり」というわけで、文体が髣髴させるかれの知性のなりたちそのものが、征服者という人間類型を伝えるあまりにも希少な標本のひとつなのである。だが、それでも、この面白

さは日本語に移すことができない。先に述べたような文体の味は訳してしまえばただの書き癖で読者の迷惑になるばかりだ。したがってなんらかの処理をほどこさなくてはならないのだが、しかし原文の意味内容はもちろん言葉遣いもできるだけ保存したい。このあたりの苦心は訳者のあとがきに控えめに述べられているが、上の試訳と小林訳の対応箇所を比較対照してみるとわかるように、全体としてかなり成功しているようだ。なにより速く読めるし、上に述べたような事情さえのみこんでいれば専門家でも安心して使うことができるテキストである。牛島氏にしても小林氏にしても、卓越した語学力に加えて、テキストに対する執着、訳語の語彙の豊富さとそれを記憶の底から取り出してくる運動神経は人並みはずれていて、しかも仕事が速い。読者一同になりかわって訳者二氏と出版社に謝意を表するものである。

以下、評者の最近の問題関心のために、ガルシラーソがどう役にたつかを書きつけてこの文章を終わりたい。評者の関心とは、クスコ周辺、クンティスーユ、コリャスーユを包括するペルー南部地域の、征服前後における人間の移動なのだが、このノートは専門外の読者のための読書案内を兼ねると思う。なぜならば、この種の書物とつきあう上で障害になるのは、なによりも頻出する片仮名の地名だからである。地図が付録についているが、メキシコはまだしも、ペルー・アンデスの地形の複雑な起伏は容易に把握できるものではない。何にしても大航海時代叢書は素人の感想と専門家の研究とだけでなく、その中間くらいの立場でもっと評判されていいのである。

『ペルー征服史』(1847年)を書いたときプレスコットは、シエサ・デ・レオンの『ペルー誌』は刊行された第一部しか書かれなかったものと信じていた。だが、サルミエント・デ・ガンボアの著作はエル・エスコリアルの手書き本の写しを手に入れていた。サルミエントとガルシラーソを照合して、プレスコットはインカ人の初期の歴史を詳説することをあっさり諦めた。インカ王位の継承は、ガルシラーソではマンコ・カパック以来十二

代にわたって父から長子へ一度の紛糾もなく行われてきたことになっている。ところがサルミエントでは陰謀と廃位と革命が渦巻いている。ガルシラーソではそもそもの初めからインカは母と同じくする姉妹をコヤとしてきたことになっているが、サルミエントでは盛んに周囲の民族集団と政略結婚をしている。ガルシラーソはすでに第二代シンチ・ロカにティティカカ湖に向かってチュンカーラまで進出させているが、サルミエントでは帝国の拡大は第九代パチャクティ・インカ・ユパンキのチャンカ人との戦争以後のことになる<sup>9)</sup>。結局、その簡略な叙述においてプレスコットは大略サルミエントに依拠している。二十世紀になって、たとえばミーンズはガルシラーソびいきだったが、ジョン・ローはガルシラーソのインカ帝国拡大史を「空想的」として片付けた。現在では大半の概説書は、サルミエントとシエサ・デ・レオンの叙述を但し書きつきで紹介し、ガルシラーソの叙述を相手にしない。

シエサの『ペルー誌』第二部(邦題『インカ帝国史』増田義郎訳)の叙述は、サルミエントより調査の時期が二十年以上も早いうえ、口述資料の加工度が低く、副王フランシスコ・デ・トレドの意を汲んでインカの統治を暴政であったと証拠立てようという意図が窺われるサルミエントと違って、何やらもっと欲も得もない情熱で書かれている。そのためにたいへん評価が高いのだが、大体の線でサルミエントと一致しているので、ガルシラーソの評判はいよいよ悪い。余談だが、上の訳本の解説で増田義郎が指摘しているように、シエサの魅力はなんといってもかれの卓越したパワー・ポリティクスのセンスにある。クスコのインカ人は、南のティティカカ湖周辺(コリャスーユ)のふたつの強大な首長国(ハトゥンコリャオとチュクィート)の圧迫をつねに気にしている。第八代ピラコチャ・インカがこれらを臣従させるのだが、かれはクスコ市内の内紛に悩まされながら、北のウルバンバ川流域ユカイの谷を制圧し、そこの豊富なトウモロコシ資源を手中にした人物である。ピラコチャがハトゥンコリャオとチュクィートの間に勃発した戦争を利用し、手前のカナス人とカンチェス人の地域を

武力制圧し、巧妙な示威外交を駆使してコリャスーユを臣従させるくんだり(ここはサルミエントにはない)、そうしてビラコチャが老境に入って消極的になり、西のチャンカ人の急速な強大化に対応を誤ったとき、次男のパチャクティが父と兄をおしのけてクスコ人のリーダーシップをとるくんだり(ここはサルミエントにある)などは、口述資料の素朴さを残しながらまるで三国史を読むようだ。こういう魅力はガルシラーソにはない。

ガルシラーソはシエサの第一部をしきりと傍証に使っているが、第二部の存在は知らない。サルミエントも手に入れていない。アコスタはよく読んでいる。アコスタのインカ帝国史叙述はごく簡略だが、チャンカ戦争に際してのビラコチャとパチャクティの対立は書きこまれているから、サルミエント系の情報に基づいているものと思われる。おそらくガルシラーソはサルミエントもシエサも知らないままにアコスタや、ゴマラ、サラテだけを読んで、インカ帝国拡大史の知識の現状がアコスタからの簡略な叙述にとどまるものと考え、自分の知見を後世に伝えておく必要を感じて『皇統記』に拡大史叙述を含めたのではないか。ガルシラーソの帝国拡大史、とくにその前半の材源がどういう性格のものであったかは明らかでないけれども、思いついたことがあるので書きつけておく。手がかりは、『皇統記』の太陽の大祭についての一節である。「さて、インカたちの杯を太陽像に奉った神官たちは、今度は神殿の入口に赴いて、クラーカたちから杯を受け取るのであるが、その際、クラーカたちは厳格な序列、つまり、それぞれの地方がインカ帝国に服属した時間的順番に従って杯を手渡した」(第6の書第21章) 続く乾杯におけるこの序列の重要性については、同じ巻の第23章で詳しく述べられている。またクスコ市の内部で各部族が割り当てられた居住地区にもこの序列は反映されていた。「かくして、初期にインカの臣下となった者たちの住居は、クスコを形成する大きな円の内部に設けられ、それ以降に服属するようになった地方の部族は、それぞれの地理的条件に応じてその外側に居を定めていった」(第7の書第9章) ベルーのフランクリン・ピースが言っているのだが、インカ帝国史をめぐるクロニス

タの情報は書きとめる過程で変形をこうむってこそおれ、もとは民族学者が扱うような口述資料なのであって、したがってそれを伝える人々がかつてどうであったかというよりは、今現在どのようであるかとの関連において解釈されなくてはならないのである。たとえば十二人のインカの皇統にしても、歴史的事実というよりは、各々の子孫と伝えられるクスコのアイユを説明するものとして意義があった。口述資料に反映される伝承者たちの世界観はなによりも儀礼にその表現をもつだろう。とすれば、ひとつの仮説として、ガルシラーソが大伯父をはじめとするインフォーマントから少年期に聞きとった情報とは、かれらがかつて参加したインティ・ライミ等の儀礼で各地方のクラーカたちが占めた序列であって、ガルシラーソはそれを上位から下位へ、十二人のインカに適当に割りふっていくことでかれの帝国拡大史を組み立てたのだと考えることが許されるのではないか。ガルシラーソは第二代シンチ・ロカと第三代リョケ・ユパンキにまず最大の文明地域ティティカカ湖沿岸を征服させ、それから第四代マイタ・カパックと第五代カパック・ユパンキにクンティスーユを平らげさせ、第六代インカ・ロカはルカナスを押さえてからチャンカと接触し、アンティスーユに進み、そしてティティカカ湖のかなたチャルカスへすすんでゆく。いかにもクスコで敬意を持たれていた順番としてそれらしい序列である。

このように考えるとき、ガルシラーソの挙げている夥しい地名は、クスコ人の地理的概念を伝えるものとしてたいへん貴重なものだとわかる。たとえば、クンティスーユがそうである。クスコーコリャオを結ぶ高原の道とナスカーアレキパの海岸の道の間には分厚い山脈が横たわっていて、これを横断する横谷の道がどこを通過していたかは重要な問題である。ポトシ銀山の開発後、アレキパ市とコリャオ地方を結ぶ道はペルー南部の中心的交通路になったが、ガルシラーソのインカ征服軍はここを通過していない。コリャオからの道はアレキパの東のコチューナ、モケグア地域(コリャオ勢力の伝統的な海岸部植民地群)に通じるのだ。第四代マイタ・カパックがコリャスーユ遠征の途中でハトゥン・コリャオから西に向かい、山脈を越

え、ハトゥンブーノの砂漠を越えてこの地域に達している。これらはクンティスーユでなくコリヤスーユに属する。さて、同じインカはアプリマックに架橋してクンティスーユに進むが、架橋地点はチンチャスーユ道のクラワシでなく上流のアクチャであって、川向こうのコタパンパ地方チュンピウィルカとウィリリを制圧し、そして南の巨大な山塊を越えにかかる。「十六レグアも続く無人の荒野」と「幅三レグアもあろうかと思われる危険な沼地」がそれであって、後者は土手道を建造して押し渡る。そこでインカはアルカ、タウリスマ、コタワシといった牧民のいる村々を通り過ぎ、パリワナコチャの湖に達するとそれ以上海岸に進まず、東に進路を転ずる。標高六四二五メートルのヌド・コロプーナをはじめとする雪山の間のコロプーナの荒野を抜けて、アルーニ (不詳) からコリヤーワにいたる山脈の西の麓に沿う道を辿る。アレキパ盆地はその道の終点で、コリヤーワの植民地として描かれている。第五代カパック・ユバンキは今度は少し下流のワカチャーカでアプリマックに架橋する。コタパンパ地方ではヤナワラが制圧され、そこから西のアイマラ、ウマスーユに進む。弟をさらにケチュア地域に進ませ、そこでアンダワイラスのチャンカ勢力の鼻先をかすめる。ここで南に折れてワリャリーパの荒野をその一番狭い部分で横断すると、三五レグアでハカリに着く。初めてユンカスと呼ばれる海岸地帯に出たわけであり、海岸に沿って東に折れ、アレキパ市南東のウピナスまで一挙に制圧する。次の遠征は王子インカ・ロカによるそれで、その遠征路はもはやクンティスーユでなくチンチャスーユに属する。アプリマックはクラワシ手前で筏で渡る。西へ向かってアバンカイまで進出し、ここで南に折れコチャカーサの荒野を横断し、二レグアでスーラに出る。スーラからルカナスに出、さらに海岸近いナスカに出る。(ここで記述に重複があって、アレキパ海岸地方はもう一度征服されている) インカ・ロカは第六代インカとして即位するとかつて筏で渡った地点でアプリマックに架橋し、今度はアバンカイからまっすぐにアンダワイラスに進んでチャンカを服属させたことになっている。

以上、クスコから南の山を越える三つの道が特定され、各々にアプリマック河の三つの橋が対応しているわけである。第一にコタワシからパリワナコチャに出てコリヤーワにいたるマイタ・カパックの道、第二にケチュア地域東半からハカリにでるカパック・ユパンキの道。第三にアバンカイからナスカに出るインカ・ロカの道。このうち、第一のマイタ・カパックの征服路こそインカ以前のクンティスーユにおける主要交通路であったろう。たとえばアレキパ盆地にヤナワラ人とチュンビウィルカ人の植民地があったことについては、アレキパの地方文書からロドリゲス・ガルドスが証拠立てている。こういうわけで、各々の征服の年代についてはほとんどあてにならないにせよ、ガルシラーソの帝国拡大史はクスコから見たペルーの地理的概念を時間軸の上に展開したものと考えるとき、頭の中を整理するのに案外役に立つのである。「このような地名をいちいち列挙するのはもっぱらペルーの人間のためであって、他所の人びとにとっては不必要で煩わしいものに思われることであろう。これも、すべての人に役立つものを書きたいという私の願望ゆえであるとして、ご容赦願いたい」(第2の書第16章)とガルシラーソは言い訳しているが、かれのインカ帝国成立史はイリアッド第二歌の船づくしやロランの歌バリガン・エピソードの東西両世界の民族の表同様に、ガルシラーソが力をこめて書きあげたアンデス世界地誌として読むことができるのだ。

- 1) サルミエントの報告はBAEのガルシラーソの巻に付録としてついている。内容はアコスタ『新大陸自然文化史』下巻の増田義郎による補注13, 14, 15に親切に要約されている。ガルシラーソを読む前にこの補注とシエサ第二部の31-74章を通読しておくといい。

高 橋 均(立正大学)